薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・

２０２０年
８月２１日
第１０１号

センニンソウ（キンポウゲ科）

第三圃場近く、クチナシの木の後ろで真っ白な十字形の花が沢山見られます。日本各地の日当たりの良いところで、他物に絡みついて伸びる蔓性の多年草です。花後に出来る果実は白銀色の長毛を生じ、この姿が髭を蓄えた仙人に似ていることから、名が付きました。同じセンニンソウ属のボタンヅルとは、花がそっくりで見分けがつきにくいですね。見分け方は葉で区別します。センニンソウは小葉が全縁でなめらかですが、ボタンヅルは葉にノコギリの様なギザギザ（鋸歯）があります。センニンソウの葉の汁液を皮膚に付けると炎症を起こし、しばしば水疱を生じます。民間で扁桃炎の改善にこの汁液を用いますが、十分に注意してください。センニンソウ属には、園芸植物のクレマチスやテッセンがありますが、汁液が皮膚に付くと炎症を起こしますので、要注意です。生薬の威霊仙（イレイセン）は、センニンソウ属サキシマボタンヅルの根と根茎を基原とし、祛風湿薬として疎経活血湯などの漢方薬に配合されます。

トウモロコシ（イネ科）

第二圃場で高さ２ｍくらいの茎に雄花、雌花が2段で咲いているのが確認できます。メキシコからグアテマラに自生する「テオシント」というイネ科の植物の亜種とされる１年草の草本です。紀元前5000年頃には大規模栽培されていたようです。日本にはコロンブスがヨーロッパに持ち込んだものをポルトガル人によって16世紀末に導入されました。トウモロコシの雄花は先端に、雌花は葉のもとの苞葉に包まれ、先に髭の毛のような雌蕊の先端（花柱）が顔をだし、ここに花粉がうまく付かないと実入りが悪くなります。

　薬学との関わりとしては、賦形剤で用いるトウモロコシデンプンと、軟膏用基剤として用いるトウモロコシ油が、日本薬局方に収載されているのと、花柱の毛（ひげ）を南蛮毛（ナンバンモウ）といい、利尿を目的とした民間薬として用います。日本薬局方では、生薬コウイの基原植物の１つとしても規定されていますね。

池の横ではサルスベリの花が見ごろですよ！